海外日本語教師アシスタント実習プログラムにおける異文化間能力

―日本人性に着目して―

青木　香代子（茨城大学）

１．はじめに

本発表では、A 大学においてグローバル人材育成推進事業の一環として実施されてきたSEND プログラム（海外日本語教師アシスタント実習プログラム）に参加した学生の異文化間能力を取り上げる。文部科学省は、グローバルな舞台で活躍できる人材に必要な要素の一つとして、「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」を挙げている。ここでは、「日本人」とは誰のことを指すのかが問われることはないままに「日本人」が「異文化を理解する」とされている。同様に、本発表で取り扱うような海外体験プログラムにおける「異文化理解」というとき、「異文化」を理解しようとしているのは「(マジョリティの）日本人」であることがほとんどである。しかし、特権性を持つ「日本人」の側の視点が批判的に問われることなく、海外体験によって異文化に対する理解が深まり、意識変容が促されるとされることが多いのではないだろうか。海外体験プログラムは、「日本人であること」を問う（問い直す）きっかけとなる可能性があるはずであるが、その問いが深められることは少ないのではないだろうか。「異文化間能力をいかす」ことを考える際にも、「異文化」と接する、あるいは向き合う側の「(マジョリティという特権性を持った）日本人であること」の視点が必要であると考える。自文化の透明性（それまで当たり前と考えてきたこと）や日本人であることの特権性や優位性に気づき、自分や他者の文化やアイデンティティを相対的に捉え、自分とは異なる背景を持つ他者とよりよい関係を築いていくことが重要である。

本発表では、SEND プログラムに参加した学生の報告書の分析を中心に、「日本人性」から見た異文化間能力にはどのようなものが見られたか、また異文化間能力に含まれる日本人性の認識の段階にはどのようなものがあるかを明らかにすることを目的とした。

２．先行研究の検討と分析枠組み

「日本人性」は、ホワイトネス研究の視座に着想を得たものである。ホワイトネスとは、Frankenbeg（1993）によれば、歴史的、政治的、社会的、文化的、経済的に構築されてきたもので、アメリカ合衆国において「ヨーロッパ系白人」とされる人たちが持っている特権や無徴化された文化や規範、価値観を含む。Frankenberg は、ホワイトネス研究の観点から見た人種の認識について、（１）人種の不認識、（２）人種の違いの否定・回避、（３）人種とその社会構造・権力についての再考、（４）沈黙から言葉へ、（５）言葉から行動へのプロセスがあると分析した。翻って、日本人性は、可視化されない社会的規範を形成し、構造的な特権を持つことを含意している（松尾 2005)。さらに戴（2005）は、文化的差異の尊重や理解にとどまるのではなく、「日本人であること」がどのような社会的、文化的優位性を内包しているのかを問うことが重要であると指摘している。

これらの視点から異文化間能力について見てみると、他者の文化に対する敬意や寛容さ（態度)、文化的自己認識、他者の文化に対する理解（知識・理解)、観察する・分析する・関連付ける・批判的思考力（スキル）だけでなく、柔軟性、文化相対的視点やクリティカルな文化意識が重要である（Deardorff 2006; Byram 2009)。これに加え、自文化の透明性や、自分の中の偏見やステレオタイプ、特権性や優位性に気づき、他者と対等で水平的な関係を築くことも日本人性の観点から見た異文化間能力であるといえる。

３．研究方法

本発表では､2013 年度～2014 年度に SEND プログラムに参加した 2 期生 33 名および 2015 年度～2016 年度に参加した 4 期生 34 名のうち、異文化間能力に関して記述が厚いと思われる学生計 14 名（2 期生 6 名、4 期生 8 名）がプログラム終了後に提出した報告書を中心に分析した。分析方法として、クレズウェル（2007）が示した質的研究の分析手順および佐藤（2008）のオープン・コーディング、焦点的コーディングを援用した。

４．考察

４－１．日本人性の視点から見た異文化間能力

①派遣先へのイメージの変化：学生は、派遣先の教員や学生との交流を通して、それまで抱いていた派遣先に対するイメージが変化した。また、アジアへの帰属意識に気づいたという学生もいた。【文化的自己認識】【関連付けるスキル】

②学習者の文化的背景への対応：タイの大学で実習を行った学生は、教科書で使用されている語彙の説明に含まれる文化的意味に気づき、それに対応させることができた。【クリティカルな文化意識】【文化相対的視点】【柔軟性】

③日本語母語話者教師としての特権性への気づき：中国の大学で実習を行った学生は、日本語を教える際、教師として、また日本語母語話者として持ち得る特権性について省察し、学習者と対等な関係を築こうとしていた。【特権性への気づき】

４－２．日本人性の認識の段階

上記①～③は、Frankenberg が示した認識の段階で見ると、それまでの自分が当たり前に捉えてきたことを見直しており､「社会構造･権力についての再考」の段階であるといえる。特に③は、日本語母語話者教師としての特権性や学習者との対等な関係を築くことの重要性にも触れている。その一方で、学生の中には異文化との共存や異文化環境での適応には否定的な記述も少数ではあるが見られた。これらは「違いの否定・回避」の段階であると考えられる。

海外日本語教師アシスタント実習において、参加学生の異文化間能力には、文化相対的視点やクリティカルな文化意識、特権性への気づきなど、日本人性の視点から見ても重要なものが見られた。また、日本人性の認識については、特権性やそれを生み出す社会構造には無自覚であることが多かったため、自分と異なる文化を持つ人と協働していくためには、このような視点も意識したプログラム作りが必要である。

引用文献

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法―原理・方法・実践―』新曜社

戴エイカ（2005）「『多文化共生』と『日本人』―『文化』と『共生』の再検証」『異文化間教育』22、27-41 頁

松尾知明（2005）「『ホワイトネス研究』と『日本人性』―異文化間教育研究への新しい視座―」『異文化間教育』22、15-26 頁

Byram, Michael 著、細川英雄監修、山田悦子、吉村由美子訳、（2015）『相互文化的能力を育む外国語教育: グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店

Creswell, John, W 著、 操華子・森岡崇訳（2007）『研究デザイン ： 質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会

Deardorff, Darla K. (2006). Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization. *Journal of Studies in International Education*. Vol. 10 No.3, 241-266.

Frankenberg, R. (1993). *White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness*. Minneapolis: University of Minnesota Press.